

社会システム科学概論2006 第11回

- 1 社会学と社会調査
- 2 社会調査の現在
- 3 社会調査の課題

社会学を学ぶ

- 1)社会学的視点・思考方法の習得
 - 社会学理論・社会学学説史の学習
 - Q 社会学理論とは何か？
- 2)社会事象の調査・分析方法の習得
 - 社会調査実習、社会統計の学習等
 - Q 社会調査をいかに行うか？

社会調査法

- 1 社会調査実習 量的社会調査の実習
 - 大量観察
 - 1)サンプリングによる母集団から代表的集団を抽出:統計的妥当性の確保
 - 2)仮説の検証 母集団にも妥当する
 - 3)社会事象に関する一般的知見
 - 学生がやるには困難が多い(手間、資金)

- 2 殆どの卒論・修論:質的調査
 - 1)参与観察 実は少ない
 - 2)事例調査 地域、団体
 - 3)非構造化インタビュー
 - 4)サンプル数、事例数が少ない:特殊な事実
 - 5)調査を始める前に自分が何を明らかにするのか明確ではない場合も使える

社会調査をめぐる一般的状況

- 似田貝1974 社会調査の曲がり角
- ラポールだけで調査はできぬ
- 「正確なデータを収集するためには、調査員と被調査者との間に一定の友好的関係を成立させ、調査を円滑に行わせる」(『社会学事典』有斐閣1993)
- 被調査者が「調査」に納得しない昨今 なぜ？ Q&A

調査地被害

- 宮本常一 1972 大学の調査団へ村人「疫病神がはやく帰ってくればよい」
- 根掘り葉掘り 何のため 学問のため！
- 自治体によるずさんな市民調査 大谷信介
- 有害な調査 精神衛生・犯罪関連 監視
- プライバシーの侵害 個人的志向(性、家族)

調査研究に内在する実証主義

- 量的調査・質的調査共に、「事実」記述、「社会法則」解明：客観主義・実証主義
- 心理学と違い、条件を統制した実験不能（実験自体、非倫理的ですらある）
- だから、観察し、聞き出し、データを集め、確率論的推計を出し、社会的趨勢を、社会学理論に基づいて厳密に語る：これが研究

社会的現実把握可能か？

- W. F. Whyte, *Street Corner Society* 1943
- 反論 別の研究者は別の事実を発見
- *「現実のカメラ理論」による論争
- つまり、調査により「現実」が撮せるのか？
- 現代では、「写真」でも現実そのものではない（撮影の状況、構図、編集、流通、効果）
- これは、カメラの精度が上がっても原理的に変わらない

「社会的事実」とは何か？

- 人文・社会科学における言語論的展開
- 自己を語ることによって「私」が生まれ、
- 社会や歴史を語る行為によって社会的出来事や史実が確定されてきた
- つまり、
- 社会学で把握しようとしている、個人、社会関係、社会集団、地域社会は、全て歴史的・地域的・文化的に構築されてきた固有の観念

- 概念 差異（境界）によって定義するしかない
- 差異は事物との一義的対応ではないもの
- 家族、近隣、NPO、民族、性等々
- 人々の行動 社会的諸力の作用 個人に内在しない社会的諸関係、構造から、行動を説明する：E.デュルケム
- 人間の認識は、認識の枠組みを超えない
認識の枠組みは、社会・文化的に規定 この社会・文化を捉える概念も社会・文化的に規定されている（いれこ状態の中で認識作用）

人々の行為 意味（差異）に向けられている：解釈・理解を目指す：M.ウェーバー

ならば、

- 1 理念型（解釈の枠組）によって社会的なるものを認識
- 2 当事者の認識枠組みを理解・解釈する
- 3 社会的事実（社会的諸力に規制）は構築されたもの、構築され続けるもの
- 4 構築性を暴露、批判 フェミニズム、エスノメソドロジー、社会構築主義

調査者と被調査者の非対称的關係

- 調査は、調査者にとってメリット（秘密を知る）
- 被調査者には、デメリット（秘密を知られる・公表される 但し、語るカタルシスもあるかも）
- アクション・リサーチ/共同的行為
- 同質性の中の異質性
- フェミニスト・リサーチ 民族、同性愛、階級
-
- どのようにして、調査行為が可能か？ Q&A